

南米ペルー、ワヌコ盆地の形成期後期から末期の社会変化に関する一考察

金崎 由布子

要旨

アンデス文明形成期の後期から末期にかけての時期は、神殿の変容をはじめ、社会システムの大きな変化があったとされる。特に、後期には高い装飾性をもつ「黒色磨研土器群」がアンデス地域の広範囲に分布し、末期にはこれが消滅するという現象が注目されてきた。この土器群の中心地が後期の代表的な神殿遺跡であるチャビン・デ・ワントル遺跡であるとする立場からは、当神殿を中心とする宗教カルトが後期に成立し、その解体が当時期の社会変化をもたらしたという説が唱えられた。しかし近年の調査結果から、この変化が年代的にも物質文化においても地域的に多様であるということが示されつつある。したがって、上のような斉一的な変化の説明ではなく、各地域社会の変化とその連関から当時期の社会変化を捉えていく必要がある。

本論文での事例研究の対象地域である北部中央山地のワヌコ盆地は、後期から末期への変化の時期が他地域と比べて特に遅い。また、当地域の後期の土器は「黒色磨研土器群」の中でも特にチャビン・デ・ワントル遺跡との類似が大きい。後半にはこの土器群を在地化したような特徴をもつ「粗刻線タイプ」が出現することが知られる。本論文ではまず、当地域の後期から末期の土器と建築の変化の再検討を行った。その結果、土器の交替と神殿建築の形態・機能の変化には時期差があり、複数の変化の段階があった可能性が高いことが示された。次にこれらの変化の年代について、ベイズ推定を用いて他地域との比較を行った。これらの結果、上記の物質文化の変化の背景には、チャビン・デ・ワントル遺跡の機能停止と強い関連があると思われる、神殿での儀礼行為の行為者の変化と、それより後に起った儀礼実践そのものの変化があったという仮説が提示された。すなわち、ワヌコ盆地の事例研究から、当時期における地域社会の動態は、外部との交流関係の変化と、地域内部の集団構造の変化、また儀礼システムの変化という三つの要素の連関から説明されることが示された。

1. はじめに

南米ペルーを中心として興ったアンデス文明では、定住生活が定着した紀元前三千年頃から、大型祭祀建造物を中心とした社会が営まれた。このような建造物は「神殿」と称され、最初の神殿登場から初期国家出現直前までの時期を形成期（表1）と呼ぶ（関2010：25）。形成期後期は、地域に特徴的な精製土器や黒曜石製工芸品などの長距離交易品が各地の神殿で出土し、神殿間の交流が中央アンデス地域の広い範囲でかつてなく活発になったと考えられる時期である。一方末期になると、そのような広範囲な交流関係の証拠は減退し、神殿建築自体にも形態的・機能的に大きな変容が見られる（e.g. Burger1992；井口2017；加藤・井口1998；関1998；Shibata2014）。また、組織的戦闘の痕跡の局所的な出現（e.g. Ghezzi2006, 2016）や、都市的な居住形態の発達（e.g. Billman1996；Brennan1978, 1980, 1982）など、当時期間の移行は社会システムの大きな変化が伴うものであったとして注目される。

形成期後期の研究において特に注目されてきたのが、「チャビン様式土器」（e.g. Tello1960）や「ハナ

バリウ関連土器」（e.g. Burger1992）等と称されてきた、高度に磨研された黒色の土器群の存在である（ここでは以下「黒色磨研土器群」と称することとする）。これは圈点文や多重円文のほか、太く深い焼成前刻線により描かれた、ジャガー人間などの宗教的図像をしばしば伴うもので、ペルー極北部海岸から南山地まで各地に分布する。当時期のこのような物質文化の状況は「チャビン現象」と呼ばれ、その背後にある社会の

表1 アンデス形成期略年表（関2006：図6をもとに作成）

| 時期 | | 年代 |
|--------|----|--------------|
| インカ帝国期 | | 1450～1542年 |
| 地方王国期 | | 1000～1500年 |
| ワリ期 | | 600～1000年 |
| 地方発展期 | | 1～600年 |
| 形成期 | 末期 | 前250年～1年 |
| | 後期 | 前800年～前250年 |
| | 中期 | 前1200～前800年 |
| | 前期 | 前1800～前1200年 |
| | 早期 | 前3000～前1800年 |
| 古期 | | 前5000～前3000年 |
| 石期 | | 前9000～前5000年 |

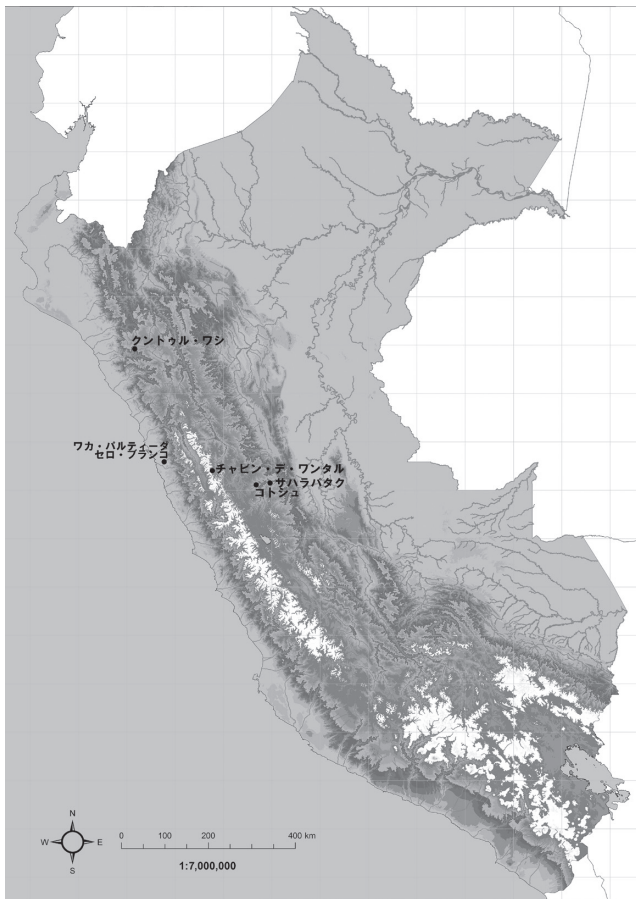


図1 本論文で言及する主な遺跡

様態が議論されてきた。

形成期後期の代表的な神殿遺跡の一つ、チャビン・デ・ワンタル遺跡（図1）を発掘した一人であるリチャード・バーガーは、1990年代に「チャビン・ホライズン」説を提示した。彼は当遺跡が「黒色磨研土器群」（バーガーの論では「ハナバリウ関連土器」）の分布の中心地であるととらえ、その背景として、後期には当遺跡を中心的な巡礼地とする「チャビン・カルト」が存在し、それにより各地の神殿が宗教的紐帯で結ばれる「チャビン・ホライズン」が成立していたと論じた（Burger1992）。この説においては、後期から末期のアンデス地域全体における社会変化は、「チャビン・カルト」の崩壊がその主要因とされた。

一方、形成期中期から末期まで継続的に利用された神殿遺跡であるクントウル・ワシ遺跡の調査では、一地域における形成期後期から末期への変化の実状が明らかにされた（e.g. 加藤編 2007；加藤・井口 1998；関 2006；Onuki ed.1995）。当遺跡では、後期は前半と後半に細分され、後期後半には典型的な「黒色磨研土器群」（当遺跡での土器タイプではKW Negro Fino）が消滅すること、前半には豊富に出土した長距離交易品の黒曜石製品が激減することなどが明らかになった。また、後期後半の当遺跡の土器は、同じカハ

マルカ地方に位置するワカロマ遺跡等と共通性が高いことなどから、当時期の変化はよりローカルな関係性の強化を志向するものであったと論じられた（関 2006）。なお、後期前半から後期後半には、建築の大規模な造り変えが行われたが、両時期の建築とも大型基壇や広場などの形成期の神殿建築の基本的な特徴を備えていた。一方末期になると、上記のような神殿建築の特徴は姿を消し、代わりに小さな部屋構造が見られるようになる（関 1998）。土器の変化も大きく、後期までには限定的だった二色のスリップを用いた装飾が主流を占めるようになる（井口 2007）。

クントウル・ワシ遺跡の調査の成果から、二つの点でバーガーの「チャビン・ホライズン」説に対して異が唱えられた（井口 1996）。一つは年代である。バーガーは当初「ハナバリウフェーズ」を紀元前 400 年から紀元前 200 年頃としており（Burger1992）、これはクントウル・ワシ遺跡の後期前半期にあたるクントウル・ワシ期の紀元前 700 年から 450 年頃という年代と大きなズレがあった（井口 1996：18-19）。もう一つは、両遺跡間の土器スタイルに見られる違いである。バーガーの説では、「ハナバリウ関連土器」はチャビン・デ・ワンタル遺跡が中心的な巡礼地として機能したために、各地でそのスタイルが模倣され、分布が広がったというように考えられた。一方クントウル・ワシ期の「黒色磨研土器群」には、北海岸の土器であるクピスニケスタイルとの関係がより強く見られることが論じられた（井口 1996：26-27）。また、加藤泰建は、形成期後期には地域を超えて機能する「広域型神殿」が複数並存し、クントウル・ワシ遺跡はそれらの一つであったという見方を提示した（加藤 2007）。

その後、チャビン・デ・ワンタル遺跡の年代は、ジョン・リックらにより行われている近年の調査結果から修正が行われつつある。それによると、当遺跡の「黒色磨研土器群」の年代（バーガーにおける「チャキナニフェーズ」および「ハナバリウフェーズ」、リックらにおける「白黒フェーズ」「サポートフェーズ」に相当）は、紀元前 900 年から開始し、紀元前 500 年頃には当遺跡は神殿の機能を停止したとされている（e.g. Rick et al.2009；Kembel and Haas2015）。また、彼らは次のワラス期の開始を紀元前 500 年頃としている。ワラス期の土器は、前時期のようなスタンプ施文が見られず、赤白二色のスリップが多用されるなど前時期の土器と大きな違いがある。

また、近年調査が進んでいる北部中央海岸ネペーニャ谷の事例では、ワカ・パルティエダ遺跡およびセロ・ブランコ遺跡において形成期後期前半から後半への物質文化の変化が明らかにされている（芝田

2011; Shibata2014)。これらの遺跡でも「黒色磨研土器群」(当遺跡の土器タイプでは Negro Fino) は後期後半には姿を消すようである。また、両遺跡では後期後半には前時期のような神殿は造られず、明確な建築址が確認されていない。かわって当地域では、形成期後期後半から出現する新たな大型建築群があり、それらは前時期に見られるような大型の基壇や広場を持たず、多数の部屋が連結した構造をもつことが明らかにされている (e.g. Chicoine2008; Chicoine and Ikehara2014)。

このように、当時期の神殿を中心とする社会の変化は、地域により大きく異なる様相を示すことが明らかにされつつある。まずクントウル・ワシ遺跡では、後期前半から後半、後期後半から末期への二段階の変化が論じられた。ここでは後者において、土器・神殿の変化がより顕著である。一方チャビン・デ・ワンタル遺跡では、後期前半にあたる年代で神殿機能が停止し、直後に土器や建築において大きく異なる文化が開始するとされている。また、ネペーニャ谷では、後期前半と後期後半の境界にあたる年代で、神殿建築の様相が大きく変化する。一方で土器については、変化も見られるものの、後期前半・後期後半での連続性も指摘される。

これらの各地域での社会変化のプロセスが、どのような地域間の相互関係のもとに生じたのかについては、未だ不明な部分が多い。特に、「チャビン・カルト」の崩壊といった、斉一的な変化を想定するようなモデルでは、近年明らかにされつつある、上記のような地域的に様々に異なる状況を説明しきれない。当時期のアンデス地域に生じた社会変化の背景は、近距離・遠距離双方の地域間・神殿間の関係や、地域内部の政体(あるいは政体群)の動態といった、様々な要因の連関から捉えられるべきであろう。

このような状況を踏まえ、各地の神殿での物質文化の変化の時期を明らかにするため、筆者は近年、各地の後期・末期の神殿遺跡の炭素年代を集成し、ベイズ推定を応用した年代の解析により比較検討した(金崎・大森 印刷中)。その結果、各地の「黒色磨研土器群」を伴う神殿建築の移行年代は、地域ごとに差があるということが明らかになった。その中で、北部中央山地に位置するワヌコ盆地では、移行年代が特に遅いということが示された。そこで本論文では、ワヌコ盆地の形成期後期・末期の物質文化、特に土器および建築の変化を再検討し、改めて地域間での年代比較を実施する。それにより、形成期後期から末期にかけての一地域社会における社会動態を、より細かい時間軸において論じることが、本論文の目的である。

2. ワヌコ盆地の形成期後期～末期の神殿建築及び土器の変化

2-1. ワヌコ盆地の特徴および当時期の遺跡

ワヌコ盆地は、アマゾン川支流のワリャガ川の上流域にあたり、アンデス山脈東斜面に位置する。気候は亜熱帯性の半乾燥地帯であり、アンデス地域の気候区分では、ユンガ地帯およびケチュア地帯に属する。なお当地域で発見されている形成期遺跡の多くは、ユンガ地帯に位置している(大貫 1998: 78-79)。1960年の東京大学アンデス調査団によるコトシュ遺跡の発掘調査開始を皮切りに、これまで日本人考古学者らにより形成期文化に関する考古学調査が行われてきた。

盆地内の一般調査から、形成期後期・末期にはワヌコ盆地には少なくとも6つのマウンド遺跡が存在したことが確認されている。そのうちコトシュ遺跡、サハラパタク遺跡、ハンカオ遺跡、パウカルバンバ遺跡、ピキミナ遺跡の5遺跡についてこれまで発掘調査が行われている。これらの調査から、ワヌコ盆地の後期の土器は、各地の「黒色磨研土器群」の中でも、器形・装飾ともにチャビン・デ・ワンタル遺跡の「ハナバリウフェーズ」の土器と非常に類似が大きいことが判明した(Izumi and Terada1972, Matsumoto and Tsurumi2011, 松本 2010)。特に、専用のスタンプを用いた複雑な押圧文が共通することは、両地域間で直接交流があったことをうかがわせる。また、建築においても、薄い平石と大きな石を交互に積む技術などの共通点がある。

一方で末期の土器は、両地域間で大きく異なっている。ワヌコ盆地では、後期の「黒色磨研土器群」の出現とともに導入されたと考えられる押圧による圏点文¹⁾が土器装飾の主要素であり続けるほか、同じく後期に出現するS字スタンプ文様が、バリエーションを増やしつつ継続するなど、後期の土器との連続性が見られる。一方ワラス期の土器では、押圧による圏点文や専用スタンプの使用等は見られず、赤・白二色のスリップを用いた彩色が土器装飾の主要素として現れる。この二色彩色の技術はワヌコ盆地ではわずかにしか発見されていない²⁾。

2-2. 各遺跡の特徴

これまで発掘調査が行われた遺跡のうち、後期・末期の建築遺構がともに明瞭に検出されたのはコトシュ遺跡(Izumi and Sono1963; Izumi and Terada1972)およびサハラパタク遺跡(井口ほか 2003; Matsumoto2009; Matsumoto and Tsurumi2011)のみである。そのため、本節ではこの二つの遺跡の建築の変遷について概観する。

コトシュ遺跡の後期の建築は、厚い土留め壁を用いて建設された大型の基壇の上に部屋状構造がのるものであり、基壇には上にあがるための主階段がそなえられた。部屋状構造では建築の重なりは明瞭ではなかったが、階段部分は最初の建設当初よりも幅を狭められた痕跡が見られた。なお、1960年代当時の発掘では、マウンドの東半分は手つかずで残されたが、主階段の残りを含む基壇建築の約半分は、この東半分に存在するとみられる³⁾。

当遺跡における末期の建築は、マウンド上に位置する上部と、裾部分に位置する下部の二か所がある。どちらの建築も、多数の部屋状構造が連結されたものである。マウンド上部の一部の部屋（AR37）は、後期の基壇の壁に接合するように造られており、後期の建築の一部が再利用された事例であるとみられる。

サハラパタク遺跡の後期の建築は、自然の丘陵を利用して三段のテラス状に整地し、広場と部屋状構造を築いたものである。当遺跡では4つの建築フェーズが設定された。そのうち3つが形成期後期、1つが末期にあたる。第1フェーズについては、発掘された面積が少なく、建築の全容は明らかでない。マウンド頂上北側に、部屋状構造と円形遺構、そして半地下式広場

の一部の可能性がある壁が検出されている。第2フェーズでは前時期の建築はほぼすべて埋められ、中央広場と周りの部屋状構造群という建築が形成される。第3フェーズでは広場の東側の一部が埋められ、広場の大きさが縮小されたが、周りの部屋状構造群は基本的に利用され続けた。第4フェーズになると、前時期の部屋状構造群、広場、広場へのアクセスの多くの部分が埋められるほか、一部では前の時期の建築に新たな壁が追加され、利用される。

2-3. ワヌコ盆地後期・末期の有文土器

次に、上記二遺跡における時期ごとの有文土器について述べる（図2、図3）。なお、以下の分類はコトシュ遺跡発掘報告書において大貫良夫により行われたものである（Onuki1972）。

先に述べたように、コトシュ遺跡の形成期後期にみられる「黒色磨研土器群」は、チャビン・デ・ワントル遺跡との類似が大きい。コトシュ遺跡タイポロジーにおいて「パウカルバンバ・ブリリアント」（以下PB）と命名されているこの土器タイプは、後期のワヌコ盆地の装飾土器（有文土器）の二派のうちの一つを成すものである。装飾はスタンプによる押圧文が主

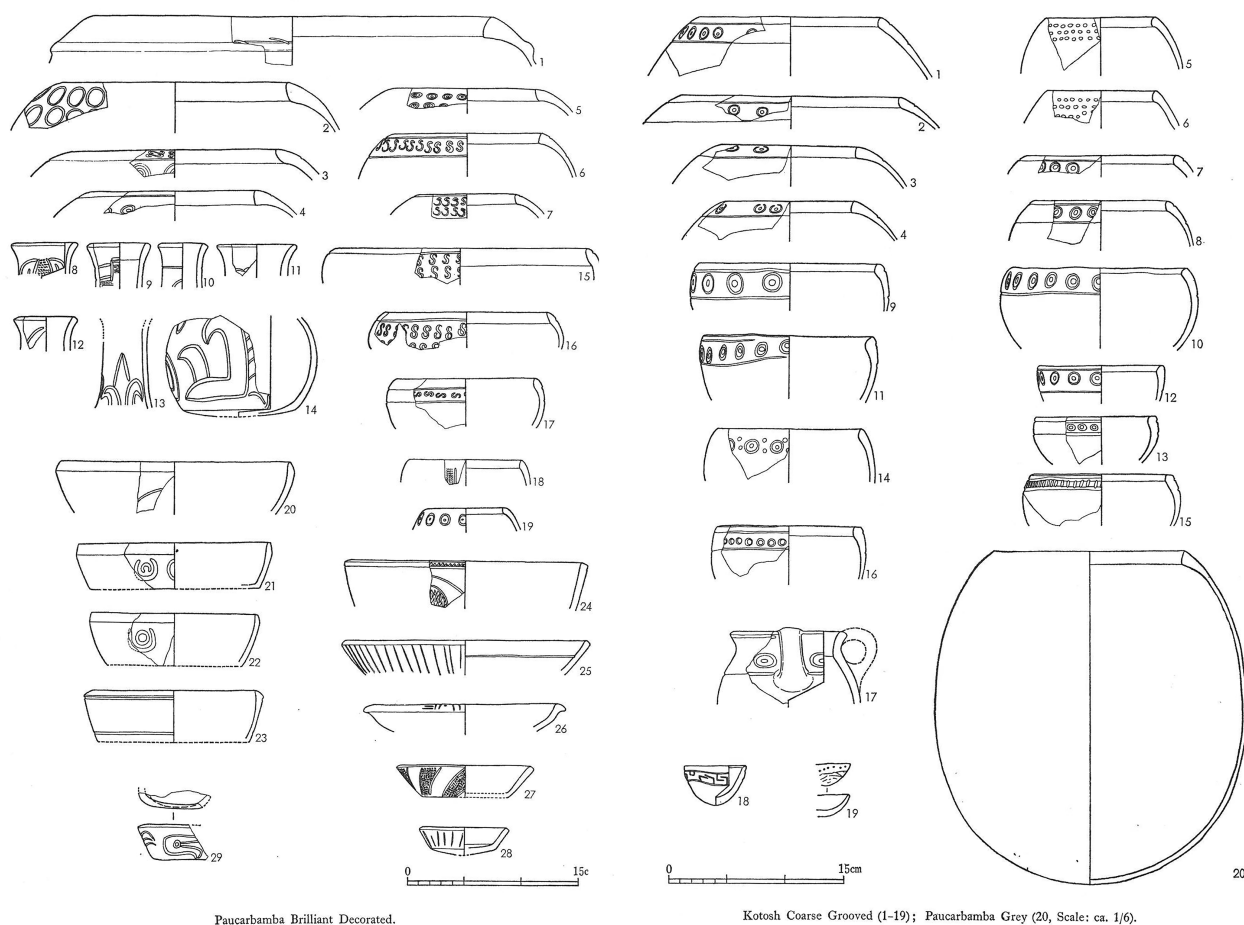


図2 ワヌコ盆地形成期後期の有文土器（Izumi and Terada1972：PL110（左），PL107（右））

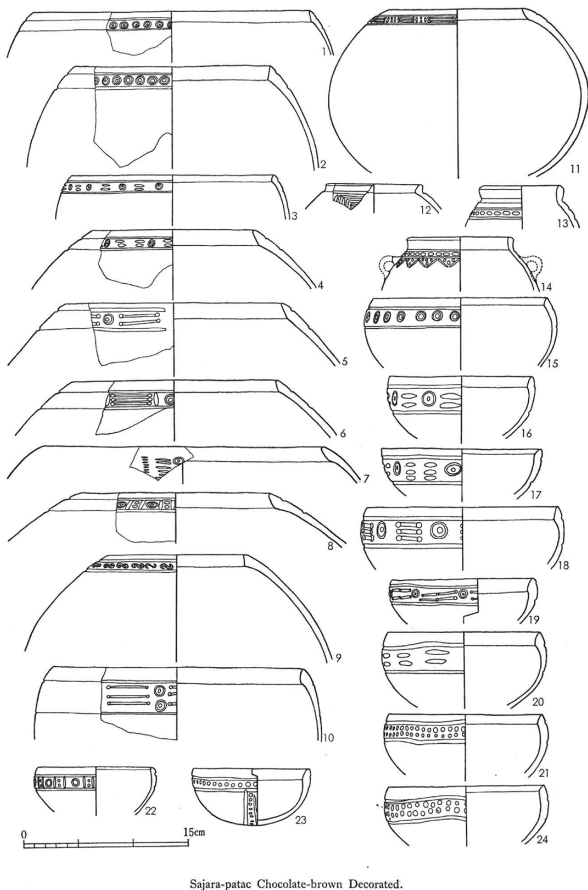


図3 ワヌコ盆地形成期末期の有文土器 (Izumi and Terada 1972: 105)

流であり、他に刻線で描かれた宗教的図像などがある。なおこのタイプには、装飾をもたないものもある。有文・無文に器形の差はなく、また無文の中には有文のものよりいっそう仕上げがよく、鏡のように磨き上げられた個体も存在する。

後期のもう一つの有文土器は、「コトシュ・コースグループド（粗刻線）」（以下 CG）と命名されたものである。これは、黒色の器面に圈点文の装飾が主流であるという点では上の PB タイプに似るが、器面に光沢はなく、多重円文や複雑文様のスタンプは存在しない。全体として PB より文様の種類は少ないが、木の葉文の列は CG にしか見られない文様である。

末期の有文土器には、「サハラパタク・チョコレートブラウン/レッド」（以下 SC）および「サンブラス・レッド・ポリッシュド」（以下 SRP）の二タイプがある。SC の文様は押圧圈点文列および圈点文と「トンツー文」、木の葉文の交互の繰り返しが主流である。「トンツー文」は CG には見られない文様で、水平な刻線の両端に 1 点ずつ刻点を施したものである。SRP は SC に類似した装飾を持つが、S 字スタンプなどバリエーションがより豊富である。また SC は鉢、無頸壺、短頸壺などの器形を持つのに対し、SRP は基本的に小型鉢の器形のみである。

2-4. 各土器タイプの出土層位の検討

上記の発掘報告書では、各土器タイプの出現・消滅時期は以下のように記述されている（Onuki 1972）。

PB タイプ：形成期中期から少量存在するが、後期のはじめに定着し、後期末に消滅する。

CG タイプ：形成期後期はじめに少量存在し、後半に増加して末期のはじめまで存続し、徐々に消滅する。

SC タイプ：形成期後期後半に少量存在し、末期に増加し、末期の最終期にやや減少する。

このように当報告書では、PB と CG、CG と SC はそれぞれ出現時期が異なるものの、時期的な重なりがあるとされている。ただし当書では、床面層・埋土層の区別なく各層位を均等に並べて縦軸とした頻度のセリエーションにより土器タイプの消長が示されており、各建築遺構と出土土器タイプの関係は明示されていない。そこで筆者は、報告書に記載された各タイプの出土層位と遺構のコンテクストを比較し、各建築における土器タイプの分布を明らかにした（表 2）。

ここで注目されるのが、KTA-1C 区における各タイプの出土状況である。この区において、上の方の層位（4~11 層）は SC のみが出土し、13・14 層では SC と CG が、15 層から下は PB のみが出土している。ここでこの層位の建築の状況を見てみると、これは AR 9 (a)、AR 9 (b)、AR10+9 と命名された三フェーズの部屋状遺構の積層部にあたる。このなかで、9~11 層は AR 9 (b) の埋土、12 層は AR 9 (b) の床土、13 層は AR10+9 の埋土、14 層は AR10+9 の床土、15 層・16 層は AR10+9 の床下に相当する。したがって、AR 9 (a) と AR 9 (b) は SC に対応、AR10+9 は SC・CG に対応し、それより下の遺構が PB に対応すると考えられる。なお、AR10+9 より下には部屋はなく、この下の遺構は後期の大型基壇上の床面であると想定される。

また、AR 各部屋の状況は、AR21 を除き全て CG・PB 混じりである。ただし、各部屋の層位と遺構の関係の詳細は明らかにされておらず、これらが床上のことなのか床下にあたるのかは不明である。

このようにして見たとき、コトシュ遺跡形成期後期の建築において、PB のみが存在する建築フェーズと、CG 出現後の建築フェーズの二つのフェーズがあることが分かる。また、後期において、PB が消滅し CG のみが存在したフェーズがあったかどうかは当調査の結果からは読み取ることが出来ないが、PB・CG のみが存在し SC が未出現である建築フェーズの存在は明確である。

すなわちコトシュ遺跡の後期・末期の建築には、① PB のみのフェーズ、② PB・CG のフェーズ、③ SC のフェーズの少なくとも三つの建築フェーズがあり、

表2 コトシュ遺跡の各土器タイプと建築・層位の対応関係 (Izumi and Terada 1972: Table 5-6, 8-9 をもとに作成)

| 区 | 層 | 建築 | 土器タイプ | | |
|--------|----|--------------|-------|----|----|
| | | | SC | CG | PB |
| KTA-1A | 4 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 5 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 6 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 7 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 8 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 9 | APat11(a) 埋土 | ○ | | |
| | 10 | APat11(a) 床土 | ○ | | |
| | 11 | APat11(b) 埋土 | ○ | | |
| | 12 | APat11(b) 埋土 | ○ | ○ | ○ |
| | 13 | APat11(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 14 | APat11(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 15 | APat11(b) 床土 | ○ | ○ | ○ |
| | 16 | APat11(b) 床下 | ○ | ○ | ○ |
| | 17 | AR23 埋土 | ○ | ○ | ○ |
| | 18 | AR23 埋土 | ○ | ○ | ○ |
| AR22 | 1 | | | ○ | ○ |
| AR26 | 1 | | ○ | ○ | ○ |
| AR25 | 1 | | | ○ | ○ |
| AR22 | 2 | | | ○ | ○ |
| AR22 | 3 | | | ○ | ○ |
| AR23 | 1 | | | ○ | ○ |
| AR27 | — | | | ○ | ○ |
| AR21 | — | | | | ○ |

| 区 | 層 | 建築 | 土器タイプ | | |
|--------|----|------------|-------|----|----|
| | | | SC | CG | PB |
| KTA-1C | 4 | AR9(a) 埋土 | ○ | | |
| | 5 | AR9(a) 埋土 | ○ | | |
| | 6 | AR9(a) 埋土 | ○ | | |
| | 7 | AR9(a) 埋土 | ○ | | |
| | 9 | AR9(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 10 | AR9(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 11 | AR9(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 12 | AR9(b) 埋土 | ○ | ○ | |
| | 13 | AR10+9 埋土 | ○ | ○ | ○ |
| | 14 | AR10+9 床土 | ○ | | ○ |
| | 15 | AR10+9 床下 | | | ○ |
| | 16 | AR10+9 床下 | | | ○ |
| KTA-1D | 1 | | ○ | | |
| | 2 | | ○ | | |
| | 3 | | ○ | | |
| | 4 | | ○ | | |
| | 5 | | ○ | | |
| | 6 | | ○ | | |
| | 7 | AR28(a) 埋土 | ○ | | |
| | 8 | AR28(a) 床土 | ○ | ○ | |
| | 9 | AR28(b) 埋土 | ○ | | ○ |
| | 10 | AR28(b) 床土 | ○ | ○ | ○ |
| | 11 | AR28(b) 床下 | ○ | ○ | ○ |

また②と③の間には CG・SC 併用フェーズが存在した可能性が高いことが読み取れる。

次に、サハラパタク遺跡の検討を行う。まず当遺跡では、「スタンプによる圈点は、フェーズ1のよく磨かれた無頸壺のみに現れ、フェーズ2～3には刻線による圈点にとってかわられる」(Matsumoto and Tsurumi 2011: 85、筆者訳)という記述がある。後半の記述はコトシュ遺跡の土器分類における CG タイプと同じものであると考えられるため、当遺跡においても、PB のみのフェーズと PB・CG のフェーズが存在することがわかる。また、当遺跡では、スタンプ施文はフェーズ1、2の良く磨かれた壺・鉢のみに現れ、フェーズ3には消滅することが述べられている(Matsumoto and Tsurumi 2011: 85)。すなわち当遺跡では、少なくとも有文土器に関しては、フェーズ3は CG タイプのみが存在するフェーズであるという可能性が高い。したがって、サハラパタク遺跡では、① PB のみのフェーズ② PB+CG のフェーズ③ CG のみのフェーズ④ (CG+?) SC のフェーズという四つのフェーズを想定することが可能である。これらをまとめると表3のようになる。

2-5. 土器タイプ間の関係

筆者は現在、2016 年から 2018 年のコトシュ遺跡・ハンカオ遺跡の発掘調査で出土した形成期土器の分析を行っている。本節では、未だ分析途中ではあるが、上で論じた PB、CG、SC の三つの土器タイプの関係について、現状における知見を述べる。

1) 各タイプにおける文様帯の構成

PB・CG・SC の三者に共通する装飾要素として、口縁直下に配置される押圧施文の繰り返しの列がある。一方で、この押圧施文列の上部・下部に施される線刻において、タイプ間の差異が見られることが判明した。まず PB では、押圧施文の上部・下部には必ずしも線刻が施されるわけではなく、また上部か下部の一方のみである個体もしばしばみられる。一方 SC では、押圧施文列はほぼ必ず上下に刻線を伴い、二本の刻線とその間の文様の繰り返しの列という組み合わせが文様帯として確立している。そして CG では、上下の刻線を伴う個体が大半だがまれに伴わないものもあり、また SC との違いとして、押圧部分に比べて刻線がきわめて浅いものが多い。

2) 無頸壺の口縁成形方法

ワヌコ盆地の形成期後期・末期の土器の大きな違い

表3 ワヌコ盆地の土器・建築の対応まとめ

| 土器タイプ | コトシュ遺跡 | サハラパタク遺跡 |
|----------|------------------|----------|
| PB | 前・AR10+9 | 第一フェーズ |
| PB+CG | AR22,23,25,26,27 | 第二フェーズ |
| CG? | — | 第三フェーズ |
| (CG+SC?) | AR10+9 | 第四フェーズ |
| SC | AR9 | |

として、無頸壺における口縁形状の差異がこれまで指摘されている。後期の無頸壺口縁はなだらかに肥厚し、裏側の折り返し部分は90度前後の角度を成している。一方末期の無頸壺では、口縁裏にくっきりと稜線が形成され、折り返し部分はより開いた角度を成す。

筆者はPB・CG・SCそれぞれの無頸壺口縁を観察し、口縁裏側の折り返しの仕上げ方に異なる特徴があることを見出した。まずPBでは、口縁裏側の粘土の折り返しの端はそのまま内側に付けられ、きれいに水平に切り取られているものが多かった。SCでは、折り返し部分はきれいになでつけられ、粘土の端は殆ど見えなくなっていた。これらの工程が上記で述べた後期・末期それぞれの口縁形状の典型的な形をつくる。一方CGでは、折り返しの端がPBのような仕上げになっているもののほか、端をやや丸めて内側につけることで、断面が特徴的な鉤型を呈するものが一定数存在することを筆者は新たに発見した。なおこのタイプの仕上げは、後期の後半層の無文無頸壺においてより顕著に見られた。

1960年代のコトシュ遺跡発掘調査で土器分析を行った大貫良夫は、のちにCGタイプについて、PB・SCの中間的な特徴をもつものであると記述している(Onuki1993:86)。筆者の今回の分析結果は、この見解を強めるものである。まず1)について、PB、CG、SCにおける文様列の上下の刻線の違いは、二本の刻線+繰り返し文様という文様帯が確立していく過程として捉えることが出来る。また、2)については、口縁形状の成形方法の全体を明らかにするためには、より詳細な分析を行わなければならないが、これまでの観察からCGに見られる鉤型の口縁形状をPBからSCへの移行段階として位置付けることは可能であると考えられる。なお、その他に圈点文の施文技術について、基本的に3タイプとも押圧施文によるものである⁴⁾が、CGではPBでは見られないような歪な円がしばしば見られるようになるという違いも見いだされた。

2-6. 小括

これまでの状況を振り返ると、ワヌコ盆地の形成期後期から末期にかけての物質文化の変化として、少なくとも二つないし三つの段階を見て取ることができ

る。一段階目は、PBのみの段階からPB・CGへの移行、すなわち「黒色磨研土器群」の後続と考えられる土器群の出現という段階である。次に、PBが消滅し、CGのみが存在した段階があった可能性がある。ただしこれはコトシュ遺跡の方では確認できず、未だ仮説状態の段階である。その次の段階が、(PB・)CGから(CG・)SC段階への移行であり、ここではそれまでの神殿建築の様態が大きく変化する。つまり、当時期のワヌコ盆地では、「黒色磨研土器群」のみを使用して神殿で活動を行っていた時期と、「黒色磨研土器群」の後続の土器タイプの利用をはじめながら、それまでの建築プランを基本的に踏襲する形で神殿での活動を継続した時期、そして神殿の形態が大きく変化し、おそらくそこでの活動自体に大きな変化が生じた時期があると考えられるのである。

3. 他地域との年代比較

前章の知見を踏まえ、本章では、ワヌコ盆地における二つの変化の時期を、他地域の神殿建築の変化の年代と比較する。先に述べたように、筆者は以前形成期の主要な神殿遺跡について、各遺跡の「黒色磨研土器群」の消滅時期の比較を行った。この時期は、経時的な放射性炭素存在比率の変化が乏しいハルシュタット・プラトー（およそ前800年から前400年）にあたり、較正年代の誤差の幅が大きいため、そのままでは比較が困難である。そこで、ベイズ推定を応用して2つの時期の境界年代を導出するという方法により、精度の高い年代比較を行った(金崎・大森 印刷中)。その結果、クントウル・ワシ遺跡における「黒色磨研土器群」を伴う建築フェーズからその消滅後の建築フェーズへの移行は、チャビン・デ・ワンタル遺跡の機能停止にやや先行し、ワヌコ盆地の後期から末期への移行年代はこれらの変化よりも明らかに遅いということが示された。

ここで、前章で論じた仮説を考慮する。すなわち、ワヌコ盆地形成期後期においてPBからCGへの移行があったというものである。前論文で扱ったワヌコ盆地の変化は、サハラパタク遺跡のフェーズ3からフェーズ4への移行、すなわち神殿建築が大きく変化した時期である。ワヌコ盆地では、これに先行して、土器の変化がまずあった可能性がある。

そこで本論文では、前論文のように各遺跡の建築フェーズを大きな2つのフェーズに振り分けてその境界年代を比較するのではなく、遺跡ごとに建築フェーズの移行年代を算出し、比較するという分析を実施した。比較したのは、サハラパタク遺跡、クントウル・ワシ遺跡、チャビン・デ・ワンタル遺跡の3遺跡である⁵⁾。サハラパタク遺跡は、4段階の建築フェーズが設定さ

れているため、それぞれの間の移行年代を算出した。クントウル・ワシ遺跡は、イドロ期（中期）、クントウル・ワシ期（後期前半）、コパ期（後期後半）、ソテラ期（末期）の4つの時期の間の移行年代を算出した⁶⁾。チャビン・デ・ワントル遺跡は、シルビア・ケンベルおよびハーバート・ハースによる2015年の論考において、A～Jの建築イベントが設定され、それぞれの炭素年代データが示されているため、これをもとにして各フェーズ間の移行年代を算出した。なお、本論考に関わるものとして、建築イベントFが黒白フェーズ（後期）の建設開始、Gがその改築、Hが最後

の建設期、Iが回廊の改築、Jがサポート期、Kが建築活動後となっている。

図4～6は各建築フェーズで得られたモデル年代、表4～6は算出された各建築フェーズ間の境界年代値を示している⁷⁾。まず図をみると、サハラパタク遺跡のフェーズ1～2の年代は、クントウル・ワシ遺跡のクントウル・ワシ期、およびチャビン・デ・ワントル遺跡の建築イベントH～Iと重なりが大きい。次にフェーズ3はチャビン・デ・ワントルのKの年代と重なりが大きく、またフェーズ4は両遺跡のどのフェーズよりも遅い年代となる。また、サハラパタク遺跡

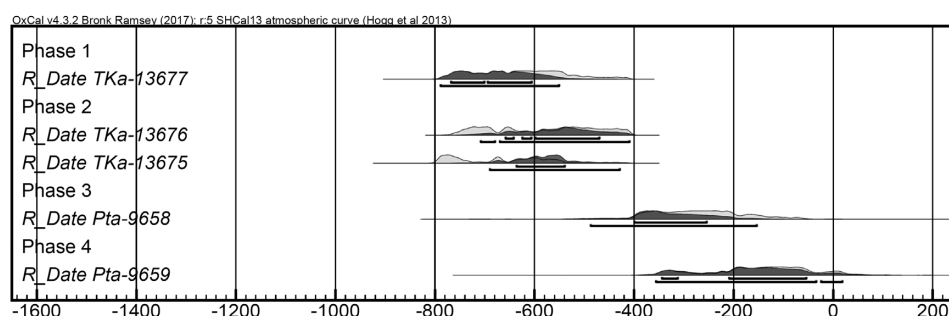


図4 解析より得られたサハラパタク遺跡の各フェーズのモデル年代

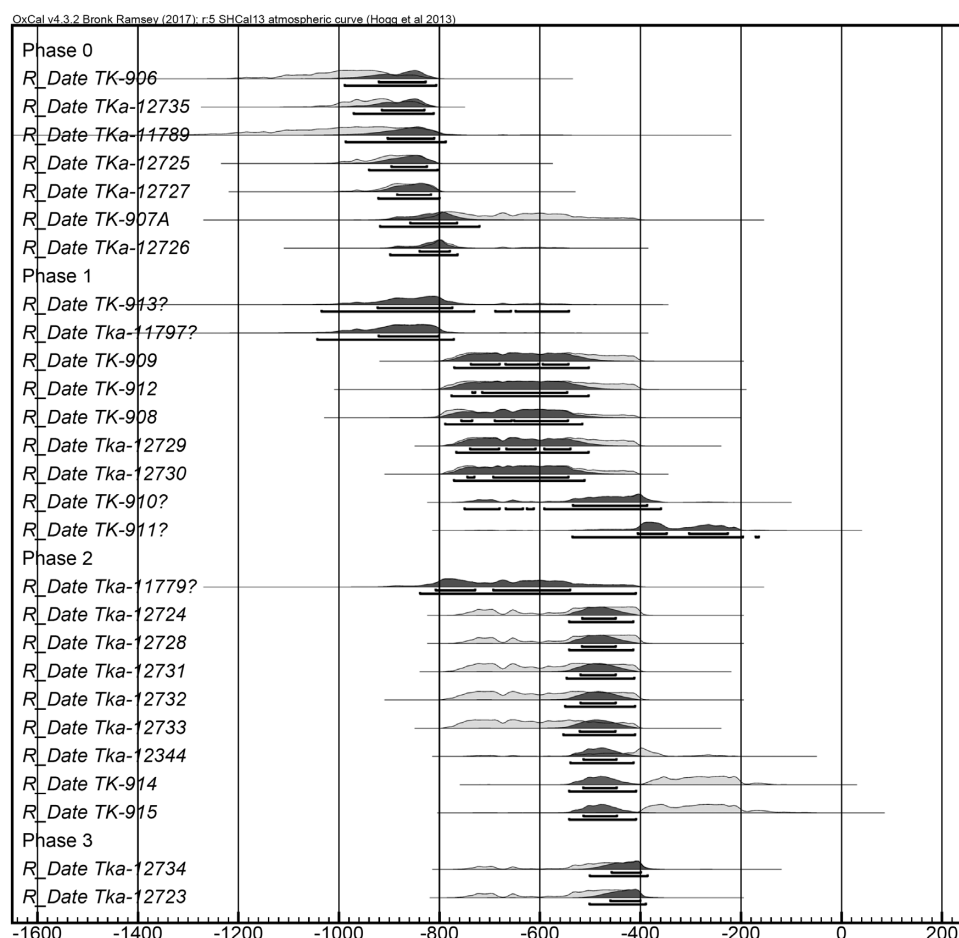


図5 解析より得られたクントウル・ワシ遺跡の各フェーズのモデル年代

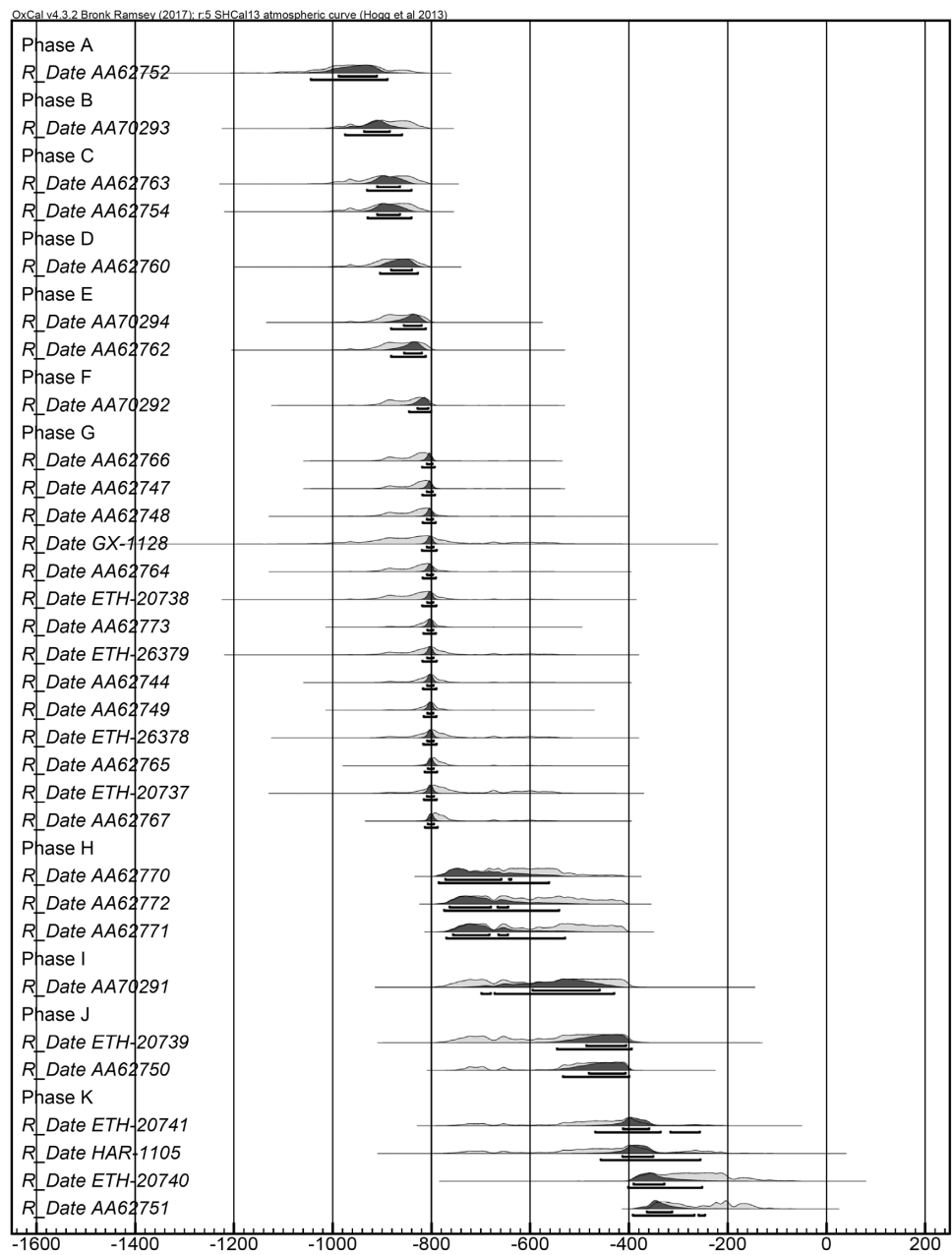


図6 解析より得られたチャビン・デ・ワンタル遺跡の各フェーズのモデル年代

表4 サハラパタク遺跡の各フェーズ間の境界年代値

| 建築フェーズ | モデル年代 (B.C.) | |
|-----------|--------------|-----------|
| | 68.2% | 95.4% |
| フェーズ1と2の間 | 690 - 560 | 770 - 510 |
| フェーズ2と3の間 | 570 - 370 | 660 - 260 |
| フェーズ3と4の間 | 360 - 160 | 420 - 40 |

表5 クントウル・ワシ遺跡の各フェーズ間の境界年代値

| 建築フェーズ | モデル年代 (B.C.) | |
|--------------|--------------|-----------|
| | 68.2% | 95.4% |
| ID 期 /KW 期の間 | 830 - 740 | 880 - 650 |
| KW 期 /CP 期の間 | 550 - 470 | 610 - 420 |
| CP 期 /ST 期の間 | 490 - 420 | 520 - 400 |

表6 チャビン・デ・ワントル遺跡の各フェーズ間の境界年代値

| 建築フェーズ | モデル年代 (B.C.) | |
|--------|--------------|------------|
| | 68.2% | 95.4% |
| A/B の間 | 970 - 900 | 1010 - 870 |
| B/C の間 | 930 - 870 | 960 - 850 |
| C/D の間 | 900 - 850 | 920 - 840 |
| D/E の間 | 870 - 830 | 900 - 820 |
| E/F の間 | 840 - 810 | 870 - 810 |
| F/G の間 | 820 - 800 | 830 - 800 |
| G/H の間 | 810 - 790 | 810 - 780 |
| H/I の間 | 690 - 530 | 740 - 470 |
| I/J の間 | 540 - 430 | 630 - 410 |
| J/K の間 | 450 - 380 | 520 - 350 |

ではフェーズ2と3の間に明瞭な境界があるが、その境界年代値はクントウル・ワシ遺跡ではKW～ST期の移行に、チャビン・デ・ワントル遺跡ではI～Kの移行に相当する。

チャビン・デ・ワントル遺跡のI～Kの間は、最後の建設が終わったのちの、建築のサポート期から機能停止までの建築イベントがあったとされる時期である。この事実とサハラパタク期のフェーズ3の年代が、チャビン・デ・ワントル遺跡の建築活動後の年代と重なることを合わせて考えると、サハラパタク遺跡のフェーズ3は、チャビン・デ・ワントル遺跡の機能停止後に建設されたフェーズであると考えことは妥当であろう。

また、クントウル・ワシ遺跡の各時期の年代は、サハラパタク遺跡のフェーズ1～2の年代としか重ならない。サハラパタク遺跡のフェーズ2/3の境界年代の年代幅が大きいため、明確な比較はできないが、上記の事実を考えるとサハラパタク遺跡のフェーズ3が開始したとき、クントウル・ワシ遺跡はすでにソテラ期に移行していた可能性が高いと言える。なお、コパ期/ソテラ期の移行と、チャビン・デ・ワントル遺跡の機能停止はモデル年代において重なりが大きい。

サハラパタク遺跡のフェーズ2と3の間は、ワヌコ盆地での「黒色磨研土器群」と在地的な「粗刻線タイプ」の交替が起こった可能性のある時期であった。しかしながらこの時期、建築の方は、前の時期の建築プランをかなり踏襲しており、遺跡機能における連続性

が指摘できる。また、当遺跡のフェーズ3～4の間は、土器ではSCが登場するとともに、前の建築を埋め新たな建築がつくられた時期であった。なお、年代は得られていないが、コトシュ遺跡においても同様の土器・建築の変化が確認されている。

したがって年代から見たとき、ワヌコ盆地の形成期後期から末期にかけての物質文化の変化には、遅くとも前400年頃までに生じた可能性が高い「黒色磨研土器群」と「粗刻線タイプ」の交替と、それよりも後に生じた神殿建築じたいの変化という二つの大きなステップがあり、前者はチャビン・デ・ワントルの機能停止時期と年代が重なる可能性が高いということが指摘できる。また、この変化は「黒色磨研土器群」の分布全体において連動しているのではなく、北部山地とは年代的に異なりが大きいということも合わせて指摘できよう。

それでは、これらの物質文化の変化の背景には、どのような地域社会の動態が想定できるだろうか。次章において現状における仮説を提示する。

4. ワヌコ盆地における形成期後期から末期の社会変化

これまでの論をまとめると以下ようになる。

- ①形成期後期のワヌコ盆地では、チャビン・デ・ワントル遺跡ハナバリウ期の土器と類似点の多い土器タイプである「パウカルバンバ・ブリリアント(PB)タイプ」が出現した。
- ②PBタイプと、その在地的な後続と考えられる「コトシュ粗刻線(CG)タイプ」の交替は、チャビン・デ・ワントル遺跡の機能停止と同時期と見なせる。一方この時期に、ワヌコ盆地の神殿遺跡で行われた建築の改築は、前フェーズの建築プランをかなりの部分で踏襲するものであった。
- ③その後、ワヌコ盆地の神殿遺跡は形態的・機能的に大きく変化した。この時期に、「コトシュ粗刻線タイプ」の後続とみられる「サハラパタク・チョコレートブラウン/レッド(SC)タイプ」が出現した。

まず①について、これまで指摘されているように、ワヌコ盆地におけるPBタイプの登場は、チャビン・デ・ワントル神殿との交流に直接的な関係があるだろう。というのも、PBタイプの器形・装飾には、ワヌコ盆地の前期～中期の土器との系統関係が追えないものが多く、一方でチャビン・デ・ワントルでは、ハナバリウ期に先行するチャキナ二期、ウラバリウ期の土器が存在するためである(Burger1992)。チャビン・デ・ワントルのウラバリウ期にあたる時期に、ワヌコ盆地の中期の土器とよく類似した土器が発見されていることから、両地域の交流は中期にもあったと考えら

れるが、その関係のあり方は①の時期には大きく変化する、より密接な関係を持つようになったのだろうと考えられる。

次に②の PB と CG の交替について見ていく。まず、CG のみが利用されるという段階は現状においてコトシュ遺跡には明確に確認されず、サハラパタク遺跡フェーズ 3 においてのみその存在の可能性が示唆されるという、未だ仮説段階を出ない段階のものであることに留意する必要がある。ただし、年代において前時期との明白な境界があり、またチャビン・デ・ワンタルの機能停止との時期の重なりという興味深い事実があることから、この段階の存在を仮定することは有意義であると筆者は考える。また、サハラパタク遺跡のフェーズ 2 の土器出土状況は、CG のみが利用されるようになる段階の前に、PB と CG が併用される時期があった可能性を示唆している。先に述べたように CG は PB と類似しているが装飾のバリエーションが少なく、またつくりや仕上げにおいて PB ほど洗練されていない。このようなタイプが PB がまだ用いられている段階で出現することは、神殿での儀礼におけるヒエラルキーの出現など、儀礼に参加する集団構成の何らかの変化を反映しているのではないかと。いずれにせよこの段階で生じた変化は、チャビン・デ・ワンタルの機能停止という外的要因によって決定的になったのだと言える。そして CG タイプが、チャビン・デ・ワンタルと関連の深い PB タイプをワヌコ盆地独自に発展（簡略化）させたものであると見ることができると考えると、これは神殿における儀礼の行為主体が、より在地的なものへと変化したことを示唆するのではないだろうか。一方で、神殿の建築プランそのものが基本的に踏襲されていることは、神殿—儀礼システムそのものは同様の形態で維持されたと解釈することが可能である。

最後に③の変化では、コトシュ遺跡でもサハラパタク遺跡でも前時期の建築が埋められ、それまでとは異なる形態の建築が形成される。一方土器の方では、SC と CG は装飾における類似性が高く、また建築もすべてを埋めるわけではなく部分的な再利用が行われているなど、連続性もみられる。これらのことは、前時期の変化とは対照的に、神殿—儀礼システムにおいて変化が生じたものの、行為主体あるいは意思決定者層の構成においては前時期のように大きな変化は生じなかったと解釈することが可能ではないだろうか。

5. 結論

以上のように、ワヌコ盆地における形成期後期から末期の社会変化のプロセスは、外部との交流関係の変化、地域内部の集団構造の変化、儀礼システムの変化

という三つの変化の連関により説明される。また、一地域社会におけるこれらの変化の背景には、他地域における社会動態や、地域を超えた儀礼実践の変容などの影響があったと考えられる。

本論文では、土器・建築・年代のデータを総合することで、一地域における後期・末期の変化について、従来よりも細かい時間軸での議論が可能となることを示した。先に触れたように、ワヌコ盆地では最近年に 3 シーズンの発掘調査が行われている。これらの調査データが加わることにより、前章で述べた社会変化プロセスに関する仮説の検証が可能になるとともに、より精度の高い編年のもとでの議論が可能となるだろう。また、現状では当時期の古環境についてのデータが少なく、ワヌコ盆地の上記の社会変化と環境変動との関連性については本論では議論が出来なかった。これについても、近い将来報告される上記調査のデータを踏まえ、儀礼システムの変化への影響等を検討していく必要がある。さらに今後、より南部の高原地帯や東部のアマゾン地域など、盆地外の周辺地域において調査データの蓄積がすすむことで、当時期の一地域社会の変化がどのような地域間の相互関係のもとにおいて展開したものであるか、そのプロセスの理解を深めることが可能となるであろう。

謝辞

本稿における土器分析の一部は、一般社団法人希有の会「平成 28 年度若手研究助成」によって実施された。また、本稿は平成 29 年度に本大学院人文社会系研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものであり、本研究を行うにあたって、東京大学考古学研究室の佐藤宏之先生、設楽博己先生、大貫静夫先生をはじめ、多くの方のご指導・ご助力をいただいた。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

[五十音順・敬称略] 丑野毅、大貫良夫、大森貴之、鶴見英成、藤井龍彦、松本雄一

- 1) 当地域では形成期前期にも押圧による圀点文が存在するが、後期のものとは大きく異なっており、また中期には見られないことから、後期・末期の圀点文と前期の圀点文とは系統を異にするものであると筆者は考えている。
- 2) ワヌコ盆地の末期の土器に類似した土器は、より南に位置するフニン高原のサン・プラス遺跡において発見されている。ただしフニン高原における形成期研究は極めて少なく、当遺跡が飛び地的にワヌコ盆地と共通した土器を有するのか、当地域の他遺跡でも同様であるのか等、現状において不明な点が多い。
- 3) 2016 年のコトシュ遺跡再発掘調査により、このマウンドの残り半分の発掘が着手された（鶴見・サラ 2016）。
- 4) CG タイプの圀点文はこれまで刻線によるものとされてきたが、2018 年の筆者の分析で、同一個体内での円の大きさがほぼ一致し、同じ位置に円のゆがみが見られる個体が多いこと、また

同じ施文具が用いられたと思われる別個体の存在などから、多くが押圧によるものであると考えられる。押圧によるものと刻線のものとの2つが併用されていたのか、またサハラパタク遺跡でも同様であるのか等は今後明らかにすべき課題である。

- 5) 解析において使用した年代データは、サハラパタク遺跡は (Matsumo and Tsurumi 2011)、クントウル・ワシ遺跡は (鶴見ほか 2007)、チャビン・デ・ワントル遺跡は (Kembel and Haas 2015) に記載されているものを用いた。また、放射性炭素年代の暦年較正および年代解析は、南半球の放射性炭素データセット SHCal13 (Hogg et al.2013) を用い、年代解析ソフトウェア OxCal4.3 (Bronk Ramsey1995) により行った。方法の詳細は (金崎・大森 印刷中) を参照されたい。
- 6) クントウル・ワシ遺跡では、各時期のサブフェーズも設定されているが、各時期で得られている炭素年代がどのサブフェーズに対応するか不明瞭なサンプルが多いため、今回はサブフェーズでの細分は行わなかった。
- 7) 図5において、phase 0 はイドロ期、phase 1 はクントウル・ワシ期、phase 2 はコパ期、phase 3 はソテラ期を表している。

引用・参考文献

日本語文献

- 井口欣也 1996 「チャビン問題再考：中央アンデス地域形成期研究の新たな展開に向けて」『リトルワールド研究報告』13：1-35
- 井口欣也 2007 「クントウル・ワシ遺跡出土の土器資料」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、平成14 - 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (S)) 研究成果報告書, 加藤泰建 (編), 59-90
- 金崎由布子・大森貴之 印刷中 「アンデス文明形成期後期社会の変容：『チャビン現象』終了年代の遺跡間・地域間比較をもとに」『年報人類学研究』、南山大学人類学研究所, 9
- 加藤泰建 2007 「先史アンデスの文明形成プロセス研究とクントウル・ワシ遺跡データベース」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、平成14-18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (S)) 研究成果報告書, 1-20
- 加藤泰建・井口欣也 1998 「コンドルの館」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』加藤泰建・関雄二編, 角川書店, 163-224
- 松本雄一 2010 「ペルー、ワヤガ川上流域における形成期の再検討」『古代アメリカ』13：1-30
- 関雄二 1998 「形成期神殿の終焉」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』加藤泰建・関雄二編, 角川書店, 225-266
- 関雄二 2006 『古代アンデス権力の考古学』京都大学学術出版会
- 関雄二 2010 『アンデスの考古学』同成社
- 芝田幸一郎 2011 『ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷からみたアンデス形成期社会の競合モデル：神殿、集う人々、旅する指導者』東京大学大学院提出博士論文
- 鶴見英成・セサル・サラ 2016 「コトシュ遺跡第4次発掘調査—コトシュ・ミト期の新知見を中心に—」『古代アメリカ学会第21回研究大会抄録集』26.
- 鶴見英成・吉田邦夫・米田穰 2007 「クントウル・ワシ遺跡の年代的位置」『先史アンデス社会の文明形成プロセス』、平成14-18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (S)) 研究成果報告書, 加藤泰建編, 49-58

欧文文献

- Billman, B. R. 1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru*. Ph.D. Dissertation, Department of

Anthropology, University of California, Santa Barbara.

- Brennan, C. T. 1978 *Investigations at Cerro Arena, Peru: Incipient Urbanism on the Peruvian North Coast*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Arizona, Tucson.
- Brennan, C. T. 1980 Cerro Arena: Early Cultural Complexity and Nucleation in North Coastal Peru. *Journal of Field Archaeology* 7(1):1-22.
- Brennan, C. T. 1982 Cerro Arena: Origins of the Urban Tradition on the Peruvian North Coast. *Current Anthropology* 23(3):247-254.
- Bronk Ramsey, C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: The OxCal program. *Radiocarbon* 37(2): 425-430.
- Burger, R. L. 1992 *Chavin and the Origin of Andean Civilization*. Thames and Hudson, New York.
- Chicoine, D. 2008 Cronología y secuencias en Huambacho, valle de Nepeña, costa de Ancash. *Boletín de Arqueología PUCP* 12:317-347.
- Chicoine, D. and H. Ikehara 2014 Ancient Urban Life at the Early Horizon Center of Caylán, Peru. *Journal of Field Archaeology* 39(4): 336-352.
- Hogg, G. A., Q. Hua, P. G. Blackwell, M. Niu, C. E. Buck, T. P. Guilderson, T. J. Heaton, J. G. Palmer, P. J. Reimer, R. W. Reimer, C. S. M. Turney, S. R.H. Zimmerman 2013 SHCal13 Southern Hemisphere Calibration, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 55(4):1889-1903.
- Inokuchi, K. 1998 La cerámica de Kuntur Wasi y el problema Chavín. *Boletín de Arqueología PUCP* 2:161-180.
- Izumi, S. and T. Sono 1963 *Excavations at Kotosh, Peru*, 1960. Kadokawa Publishing Co., Tokyo.
- Izumi, S. and K. Terada 1972 *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. University of Tokyo Press, Tokyo.
- Kembel, S. and H. Haas 2015 Radiocarbon Dates from the Monumental Architecture at Chavín de Huántar, Perú. *Journal of Archaeological Method Theory* 22(2):345-427.
- Matsumoto, Y. 2009 El manejo del espacio ritual en el sitio de Sajara-patac y sus implicancias para el "fenómeno Chavín". *Boletín de Arqueología PUCP* 13:133-158.
- Matsumoto, Y. and E. Tsurumi 2011 Archaeological investigations at Sajara-patac in the Upper Huallaga Basin, Peru. *Nawpa Pacha, Journal of Andean Archaeology* 31(1):55-100.
- Onuki, Y. 1972 Pottery and Clay Artifact. In *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*. Izumi, Seiichi and Kazuo Terada (eds.), pp.177-248, University of Tokyo Press, Tokyo.
- Onuki, Y. 1993 Las actividades ceremoniales tempranas en la Cuenca del Alto Huallaga y algunos problemas generales. In *El mundo ceremonial andino (Senri Ethnological Studies 37)*, L. Millones and Y. Onuki (eds.), pp.69-96. National Museum of Ethnology, Osaka.
- Onuki, Y.(ed.) 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco. Dos sitios del formativo en el norte del Perú*. Hokusen-sha, Tokyo.
- Rick, J. W., C. Mesia, D. Contreras, S. R. Kembel, R. M. Rick, M. Sayre and J. Wolf 2009 La cronología de Chavín de Huántar y sus implicancias para el Periodo Formativo. *Boletín de Arqueología PUCP* 13:87-132.
- Shibata, K. 2014 Centros de "Reorganización costeña" durante el Período Formativo Tardío: Un ensayo sobre la competencia faccional en el valle bajo de Nepeña, costa nor-central peruana.

In *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo* (*Senri Ethnological Studies* 89), Y. Seki (ed.), 245-260. National Museum of Ethnology, Osaka.

Tello, Julio C. 1960 *Chavín: cultura matriz de la Civilización Andina*. Universidad de San Marcos, Lima.

A Study on the Social Change of the Late and Final Formative Period in the Upper Huallaga Basin, Peru

Yuko KANEZAKI

In the archaeological studies of the Ancient Andes, the social change from the late to the final Formative Period has been attracting attention of researchers. In the final Formative Period, the ceremonial centers which flourished in the previous period were abandoned or drastically modified and the architectural complexes with other features such as long-connected rooms or fortress-like facilities appeared. In addition to, the highly polished black pottery with specific religious motifs were widely distributed in the late Formative Period and it disappeared in the beginning of the final Formative Period. Some researchers have claimed that this was caused by the collapse of a widely believed religious cult in which Chavín de Huantar, one of the largest ceremonial centers in the late Formative Period, played a dominant role. However, the recent researches have cleared that the changes of material cultures in each region did not occurred simultaneously, and now it is needed to consider the process of social change in these periods by examining interrelated change of material culture in each region in the Central Andes with more detailed chronology. Then, the objective of this article is to consider it through the case study of the Upper Huallaga Basin, where some architectural complexes in this period were investigated by Japanese archaeologists.

The date of the transition from the late to the final Formative Period of this region is notably late in comparison to those of other regions. For considering the reason of it, firstly, the author reconsidered the change of architecture and pottery of two sites, Kotosh and Sajara-patac. As a result, it was hypothesized that there were two or three stages of transition in this period. Secondly, the author compared the radiocarbon dates associated with these changes with the centers in other regions, by means of Bayesian Estimation. And it was cleared that the date of change of pottery within the late Formative Period, from highly polished black pottery to localized one, corresponded to that of abandonment of Chavin de Huantar site. However, in the Upper Huallaga Basin, the change of form and function of religious architecture did not cooccurred in this time, and it was continued to use the architectural plan of previous one. The change of it occurred later, but in turn, the features of the pottery appeared in the previous stage continued in this time. Consequently, the social change of this region in the late and final Formative Period cannot be explained by a single event, and it is supposed that it was caused by various factors including the change of interactions with other regions, the change of social structure within the region, and possibly the supra-regional change of religious-ritual systems.